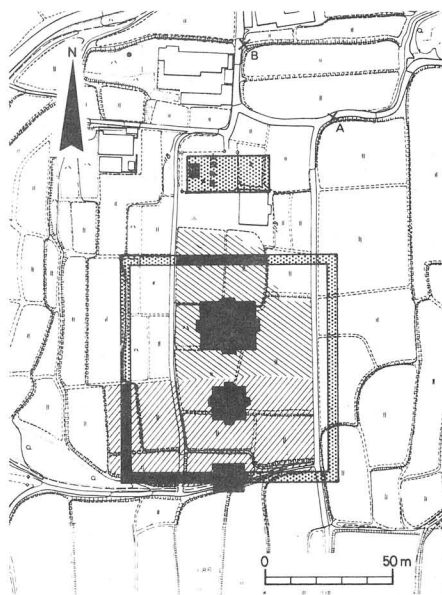


山田寺第2次（金堂・北面回廊）の調査

（昭和53年2月～昭和53年10月）

山田寺跡の発掘調査は、昭和51年度から開始した。第1次調査では、塔の規模を明らかにし、あわせて中門と西面回廊の位置を知る手掛りを得た。伽藍配置についても、従来指摘されていたような四天王寺式の配置とは異なり、北面回廊が金堂と講堂の中間に位置するものと推測できるようになった。第2次調査では、金堂と北面回廊の検出を目的とし、第1次調査区の北に接して発掘区を設けた。調査の結果、金堂と北面回廊を明らかにするとともに、燈籠や礼拝石・土壇・井戸・溝などの遺構を検出した。

金堂の遺構（S B 010） 調査前の金堂基壇は、北と西側が削平され東西約18m、南北約12mの方墳状の土壇となり、その上に2個の礎石と3個の地覆石が残っていた。発掘によって判明した金堂基壇は、四周に犬走りを巡し、四面各中央に石階を配する壇上積み基壇であり、東西21.6m（約65尺）、南北18.2m（約55尺）、高さ約2mの規模をもつ。上述の地覆石3個は移動していた



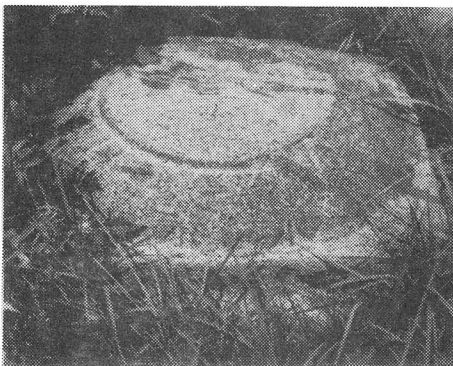
調査地位置図（1：3000）

が、礎石2個は創建時の位置をとどめていた。この他に礎石抜取り穴12ヶ所、地覆石抜取り穴3ヶ所を確認し、金堂建物を知る手掛りがえられた。それによると建物の平面は、桁行3間（約9m）、梁行2間（約6m）の身舎に、桁行3間（約15m）、梁行2間（約12m）の廂が四面につく東西棟であり、建物全体としても、正面3間、側面2間となる。このような建物平面は、従来知られている身舎と廂との関係では解釈しきれない。おそらく構造的には、法隆寺金堂のように雲型肘木の使用が想定され、

肘木の配置は玉虫厨子にみられるような扇形の割付けが考えられる。また山田寺の金堂については、『諸寺縁起集』に「金堂 一間四面 二階」と記されているが、そこにみえる間面の記法は、上述の特異な建物構造によるものであり、単純には三間四面と記せなかった結果なのであろう。

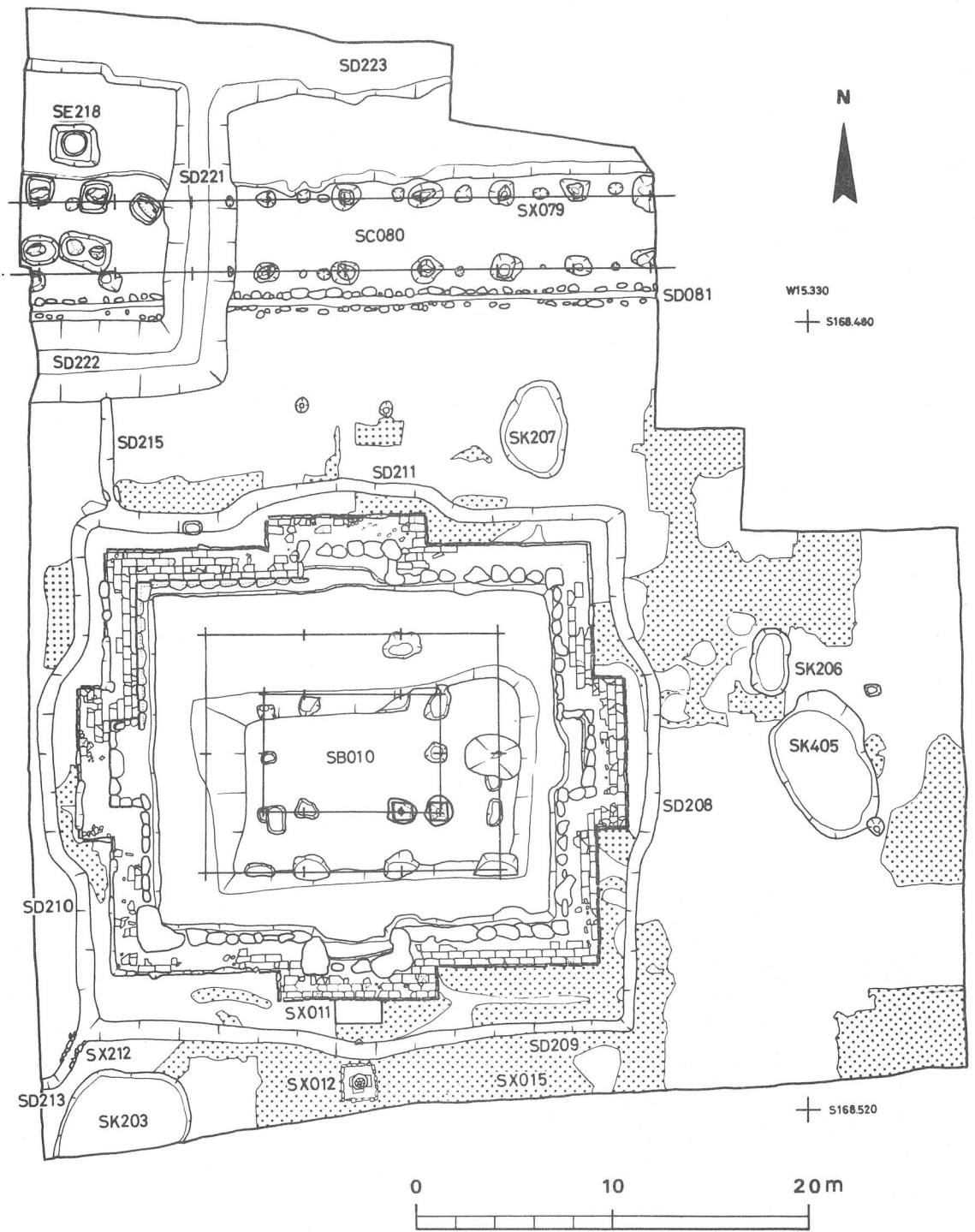
原位置を保つ2個の礎石は、身舎南面の東隅間のものであり、柱間は2mをはかる。この柱間寸法は、一尺を約30cmとする従来の規準尺度では整数値がえられない。そのことは礎石抜取り穴などから復原される建物の各柱間寸法についても同様である。そこで上述の柱間2mを6尺とみなし、一尺33.3cmの規準尺を求めて、各柱間にあてはまると、各々で整数値がえられたのである。すなわち、正面3間は15尺(約5m)等間、側面2間は18尺(約6m)等間となり、身舎については中央間15尺、両脇間6尺、側面2間9尺(約3m)となる。

金堂の礎石は、花崗岩を用い一辺1mの方座の上に円柱座を造出している。山田寺の礎石については、かつて塔跡に蓮弁を伴う礎石が存在したという報告があり、山田寺礎石を所蔵する藤田美術館の御好意により調査したところ、単弁十二弁の蓮弁をもつ礎石数個を確認した。この結果を得て、金堂基壇上の礎石を精査すると、蓮弁の先端部がわずかながらも残っており、一辺1mの方座の上に径90cmの単弁十二弁の蓮華座を造出し、その中央に径60cmの円柱座をもつ礎石が復原できる。基壇上にあった3個の地覆石は、いずれも花崗岩であり、幅25~35cm、長さ1.3m、高さ25cmの長方形の地覆座をもつ。うち2個には、地覆座中央に壁内の間柱をうける平面長方形の「くりこみ」(40×20cm)があ



山田寺礎石 (藤田美術館蔵)

る。この礎石や地覆石の据付けは、基壇築成に並行しておこなわれている。すなわち、一定の高さまで基壇を築成した段階で据付け掘形を掘り、根固め石などを用いず直接版築土上に置き、その後再び版築層を積みあげて基壇を完成している。なお、地覆石抜取り穴が入側柱列では検出されず、さらに現存する2個の礎石に

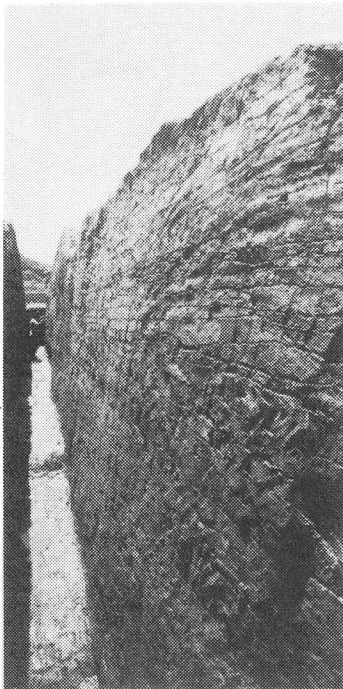


山田寺第2次調査遺構配置図

地覆座がないことから、入側柱間は開放であったものと考えられるのである。

基壇の化粧石は、西北部分で地覆石と羽目石とが残っていた。その他の部分ではすでに破壊を受け、抜取り穴を検出したにすぎない。地覆石は長さ0.6～1m、幅30cmの花崗岩を横長に用い、犬走りからの高さは35cmある。地覆石には、前面から25cmのところ「欠込み」を施し、羽目石との組合せの安定を計っている。羽目石は上半を削平され基底部のみをとどめていた。それによると羽目石は凝灰岩で作られ、地覆石前面から約10cm内方に面を揃えていたことがわかる。そして羽目石の両端には、堅框状の造出しが認められるから、これらの羽目石を並べると、各羽目石ごとに束石が立つように見えたものと思われる。また基壇四周には、多数の凝灰岩片が散乱していたから、羽目石だけでなく葛石にも凝灰岩が用いられていたであろう。

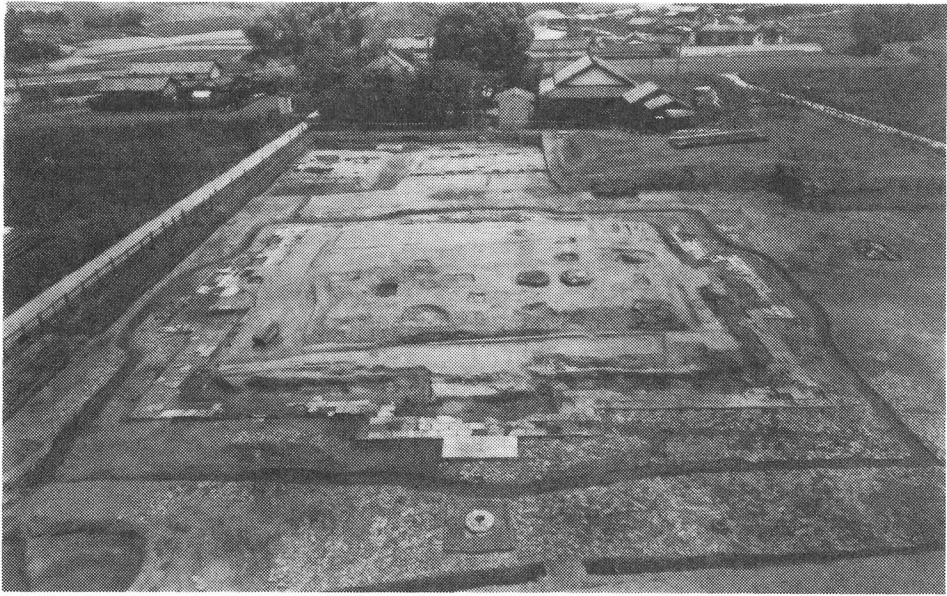
基壇は砂質と粘土質の土を交互に搗き固めた版築土（一層の厚さ3～5cm）によって築成されている。基壇築成に際しては、塔にみられたような厳密な意味での掘込み地業はなされず、南へ下がる地盤の軟弱な部分にのみ掘込みを加



金堂基壇の版築

えたものである。版築土各層は、基壇全域におよんでおり、分割して築成したものではない。版築土の高さは、基底部から現存高3.4m、礎石上面まで3.6mをはかる。版築土には、7世紀前半頃の土器が少量含まれていた。

基壇四面中央に設けられた石階のうち、西階段を除くほかは、階段の石を抜取られており、その痕跡を検出したにとどまる。段石を遺存する西階段およびその他の抜取り痕跡などから当初の階段を復原すると、東西両階段が幅4.45m、南北両階段が幅5mで、各々の出は1.6mとなる。おそらく、幅については東西両階段が13尺、南北両階段が15尺、階段の出についてはいずれも5尺となるよう意図したものであろう。このうち南北両階段



調査地全景（南から）

の幅15尺は、金堂建物の中央間の柱間寸法と一致している。西階段では、段石と北側耳石の一部が残っていた。段石は花崗岩、耳石は凝灰岩を用いる。現存する段石は最下段のもので、犬走りに接する部分に「欠込み」がある。段石の上面は犬走り面から35cmの高さにあり、本来は基壇上面まで7～8段あったものとみなしうる。階段部の構築は、基壇の版築層を一部削除してから再度版築をし直している。また階段部分の版築層には凝灰岩片を含む層があることや、段石が基壇地覆石を据えたのちに置かれていることなどから、階段の構築は、基壇の化粧作業として並行しておこなわれたものと考えられる。

耳石は、西階段北側に最大幅80cm、高さ44cm遺存していた。これは45cmの厚味をもち、段石に密着して立てられている。この耳石の表面には、浮彫りが施されている。その意匠は動物の前肢と思われ、四神のうちの西方を示す白虎とも想定されるが確かでない。また耳石の一端にも、羽目石と同様な堅框状の造出しが認められた。このことから逆に基壇各面の羽目石にも浮彫りが施されていたと想像できなくもない。羽目石の欠失が惜まれるのである。

基壇周辺の犬走りは、階段の出にあわせて幅1.6mで巡っている。犬走りは「榛原石」と呼ばれる扁平な板石を横長に使う敷き詰め、その外側に縁石を

立てる。後述する瓦敷面からの高さは約10cmである。なお階段部入隅の縁石には、水抜きのための穿孔や切欠きが施されていた。犬走り敷石の直上には焼土が堆積するとともに、南面を中心に敷石上面が強く焼けた部分がある。これにより、金堂も塔と同じく、焼失したことが判明するのである。

また階段部の構築に関連して、階段下に掘られた土壇状の穴が注意される。これは一辺1.5m、深さ1.2～1.5mの平面不整形の穴であり、東西南北各面の階段に共通して存在する。いずれも基壇の版築層を切って掘られ、階段構築時には埋められていたようである。この穴の性格については、金堂創建時の足場穴とも、水抜きの穴とも考えられるが、確かでない。

金堂周辺の遺構 金堂周辺での基本的層序は、耕土・床土・灰褐色土・瓦を多く含む焼土層・バラス敷層・瓦敷層の順であり、この状況は、塔周辺部と同様である。焼土層には、犬走り敷石面直上に堆積するものと、基壇周辺に盛り上げられたものがある。前者の焼土層は焼失時の堆積であり、後者は基壇上面のものが落下した堆積である。バラス敷は、もっとも厚いところで20cmをはかる。このバラス敷は塔周辺でみられたものと一連である。塔を発掘した第1次調査の所見によると、このバラスは10世紀代に敷かれたものである。今回の調査でも、バラス敷面を切込んで掘った土壇SK 206から11世紀前半の土器が出土しているから、両者の所見に年代的な矛盾はない。

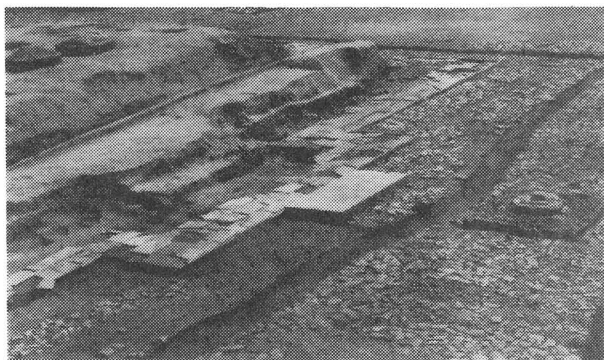
瓦敷はバラス敷の下面にあり、これも塔周辺でみられた瓦敷と一連のものである。敷かれた瓦は大半が平瓦であり、胎土や調整手法が類似する瓦が小範囲に方形に敷かれた部分がある。また瓦敷の一部には上下の重なりがみられるので、敷設に際しては、いくつか分割された作業工程が存在したのであろう。瓦敷は、直接旧地表面に敷設せず、若干整地土を置いてからおこなっている。第1次調査では、この瓦敷が8世紀後半頃に敷設されたものと推定した。今回の調査でも、瓦敷に使用された奈良時代の軒丸瓦や鬼瓦を確認し、その年代観を裏付けえた。

なお金堂創建時、基壇周辺部には整地土が入れている。この整地層は、南へ下がる地形に影響され、南側が厚く北側が薄い。南側では厚さ1mに達す

る個所もある。金堂基壇と整地土との関係については、基壇西側の所見による限り、基壇築成の方が先行する。ただしこれは年代的な差を示すものでなく、おそらく基壇を築成しながら周辺の整地をも行うという、工事の手順を示す先後関係なのであろう。

金堂南面中央の犬走りに接して礼拝石（S X 011）を検出した。これは東西2.4 m、南北1.2 m、厚さ0.2 mの板石であり、長辺を犬走り縁石に平行して置く。礼拝石に用いられた石材は、通称「竜山岩」と呼ばれる流紋岩質溶結凝灰岩で、隅を少し欠く程度でほぼ完存していた。金堂前面にこのような礼拝石をもつものとしては、大阪府四天王寺の転法輪や、家形石棺の蓋を転用した大阪府鳥坂寺の例が上げられるが、類例は少ない。

金堂の南面階段から南へ5.6 mの伽藍中軸線上には、燈籠S X 012がある。燈籠は、台座とその下にある台石、およびそれらを据えた石組の壇をとどめていた。この周辺からは凝灰岩製の火袋片などが出土している。台座は、凝灰岩の一石造りで、径60 cm、高さ15 cmの八角形を呈す。上面には単弁八弁の反花が造り出され、その中央部には竿石を立てるための円孔（径25 cm）がある。台座下には、長方形を呈する花崗岩の台石がある。台石の中央部南寄りには、台座と同様、竿石をうけるための孔（径15 cm、深さ18 cm）をもつ。なお台座は台石上に塼をつめて据えられている。この塼の使用は、台座の円孔が垂直に穿たれずやや南に偏しているため、直接台石上に据えると竿石の安定が計れないことによる。台座および台石の周囲は、玉石で方1.9 mに区画された壇となり、壇の上面にはバラスが敷かれていた。瓦敷はこの壇の縁石に密着しているので、燈籠を据えるこの壇が、8世紀に存在していたことは明らかである。ただし創建時にまで遡りうるかについては、不明な点が多い。なお現存する台座につい



礼拝石S X 011・燈籠S X 012（南西から）

ては、台石との間につめられていた塼が奈良時代のものであるから、8世紀には存在していたと考えてよいだろう。壇の上面に堆積した土層からは、燈明皿に使用された8～10世紀の土師器が出土した。

燈籠の東6.6mの瓦敷内に、円筒形土管SX 015を検出した。これは、土管を立てて埋め込んだもので、径28cm、現存高12.5cmをはかる。第1次調査時に同様の施設が、塔基壇の東側で検出されているが、ともに性格は不明である。

金堂基壇の東側に土塚SK 405を検出した。この土塚は長辺7m、短辺4.5m、深さ0.6mの不整円形の平面をもち、瓦敷の下面にある。土塚内からは、大量の瓦とともに布片や7世紀中頃に位置づけられる土器が出土した。これらは本土塚が、金堂造営工事に伴う廃物を捨て込んだ投棄塚であることを示すだけでなく、金堂の造営時期を知る手掛りを与えてくれる。同様な性格をもつ土塚は、第1次調査でも検出されている。これは塔造営工事に伴う投棄塚であり、塚内からは7世紀の第IV四半期に位置づけられる土器が出土した。この2つの発掘成果は、『上宮聖徳法王帝説』の裏書にみえる金堂の創建年代（皇極二年、643）や塔心柱の建立年代（天武二年、673）とよく合致する。また上述した金堂基壇版築層内に含まれていた土器もこの年代を示しているから、金堂の創建を皇極朝、塔の建立を天武朝と考えて大きな誤りはあるまい。

金堂の周辺をとりまく一連の溝SD 208～211は、幅0.5～1m、深さ30cm前後の素掘りのもので、南西と北西の隅に同規模の溝SD 213・215がとりつく。このうちSD 213の一部には、平瓦を側壁とする暗渠状の施設SX 212がある。これらの溝は、金堂の階段部分を避けて掘られているから、金堂焼失後階段部がさほど埋没していない時点で掘られたようである。溝内からは、12世紀中頃から後半にかけての瓦器が出土しているから、金堂は遅くとも12世紀後半には焼失していたことが推測されるのである。

このほか、金堂周辺の遺構としては、土塚SK 203・206・207がある。SK 206は、長径3.5m、短径2m、深さ0.4mの楕円形を呈する土塚であり、11世紀中頃から後半にかけての土師器とともに、斗栱や瓦などが出土した。土塚SK 203・207は、金堂をとりまく溝SD 208～211とほぼ同時期であり、

土壇内から大量の瓦が出土した。金堂焼失後の整地に伴う土壇であろう。

北面回廊の遺構 北面回廊S C 080については、調査前から金堂と講堂の間に位置するものと推定されていた。今回の調査では、金堂心から北へ26.1 m離れた位置で回廊を検出し、先の推定を裏づけた。

回廊は梁行1間の単廊で、8間分(31.2 m)を検出し、東寄りの5間分では礎石据付け穴と礎石抜き穴を確認した。抜き穴には、ばい爛した花崗岩礎石の底面が「もなかの皮」状に残っていた。それらから柱間を復原すると、金堂とは規準尺が異なり、1尺約30 cmとするのがよい。すなわち柱間は、桁行13尺(3.9 m)等間、梁行12尺(3.6 m)となる。礎石は、西半部の礎石落とし込み穴5ヶ所から6個を発見した。このうち3個は一辺70 cmの方座の上に、径60 cmの円柱座を造出し、他の3個には地覆座がつく。地覆座をもつ礎石が北側の落とし込み穴から出土しているから、回廊の北側柱列は仕切られ、内庭側の南側柱列は開放になっていたことがわかる。なお、礎石据付けにあたっては、金堂の場合と同じく、根固め石の使用はない。また回廊の焼失については、周辺が削平されており、現状ではいずれとも決しがたい。



北面回廊S C 080 (西から)

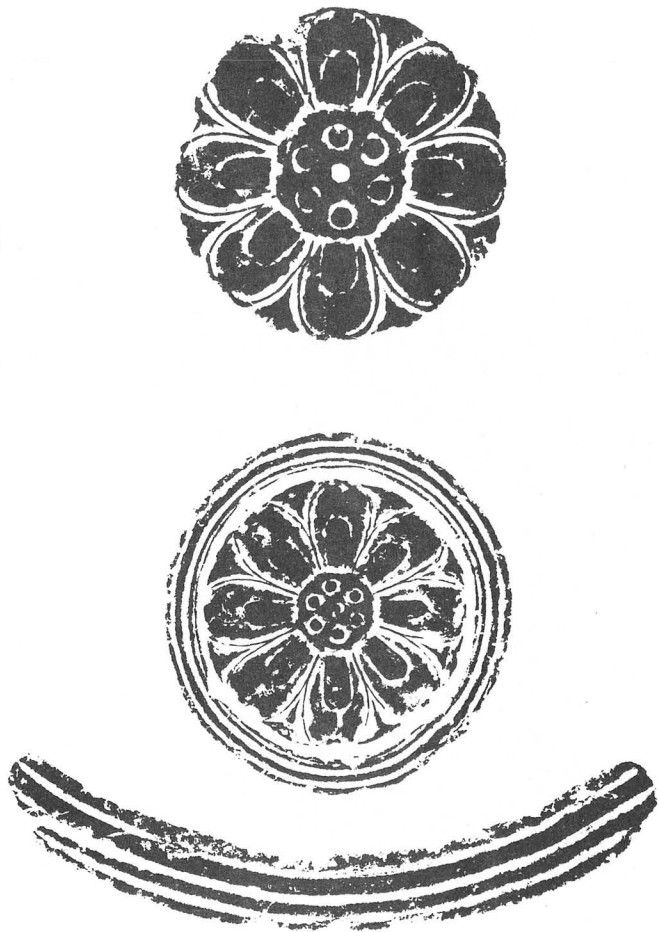
回廊基壇の基底部は、岩盤の地山を削り出して造り、その上に黄褐色粘質土を積む。基壇上面はかなり削平され現存高10 cmしかない。本来は40 cm前後であろうか。基壇南縁には、花崗岩玉石の抜き穴がならぶから、乱石積みの基壇である可能性が強い。回廊南縁と回廊心との間は3.15 mあり、基壇幅は6.3 mと復原できる。雨落溝のうち北側は破壊されていたが、南側の溝S D 081では側石に使用したとみられる花崗岩玉石の抜き穴を検出した。これにより溝の幅約45 cmが知られる。

回廊の柱列では、礎石位置の中間で掘立柱掘形とみられる穴S X 079を検出した。北側柱列のものは一辺60~70cm、深さ50cmの方形の穴で、南側柱列のものはそれより小さく浅い。足場穴かとも考えられるが、柱筋に位置することや南北の大きさが不揃いであるのも不審であり、用途は明らかでない。

また、回廊の西半北側で素掘りの井戸S E 218を検出した。これは一辺2m深さ1mの掘形をもち、埋土からは13世紀の瓦器碗や土師器皿が出土した。また回廊を破壊分断する大溝S D 221~223は、幅2m、深さ1.2mの規模をもち、S D 215より新しい。溝内から14~15世紀代の瓦や瓦器・磁器が出土した。

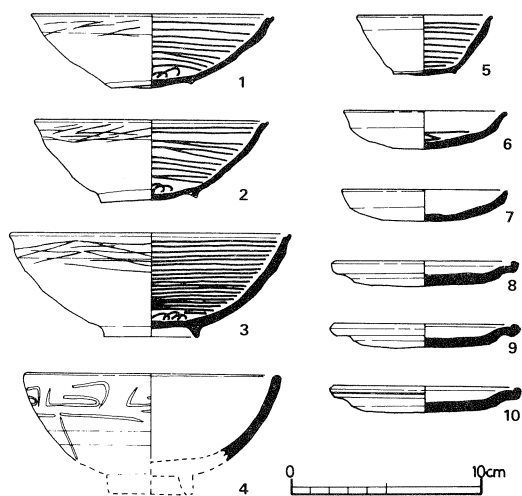
出土遺物 調査によって大量の瓦塼類をはじめとし、金銅製飾金具・鋳・銅釘・鉄釘などの金属製品、斗栱などの建築部材、土師器・須恵器・瓦器などの土器類、塼仏などが出土した。以下では瓦塼類、塼仏、土器類について記す。

軒丸瓦では、単弁八弁蓮華文のいわゆる「山田寺式」軒丸瓦が多数出土した。他に大官大寺所用瓦6231や奈良時代の複弁八弁蓮華文瓦6311Bが少数ある。この「山田寺式」軒丸瓦は、6種に分類されるが、今回の調査ではこのうち、瓦当面径が最も大きく、弁が幅広くて長いA種が多数を占める。軒平瓦では、四重弧文軒平瓦が多い。他に三重弧文軒平瓦や大官大寺所用瓦6661、平安時代の変形唐草



山田寺金堂所用種先瓦・軒瓦(1:4)

文軒平瓦などが少数ある。極先瓦では、5種に分類されるうち軒丸瓦と同様、面径が大きく彫の深いA種が過半を占めている。塔周辺の調査所見では、軒丸・極先瓦ともに小型のものが多く出土しているから、上述した軒丸瓦A、極先瓦Aを金堂所用の瓦とみて誤りあるまい。これら「山田寺式」の瓦類は、ともに胎土に砂粒を多く含み、焼成は堅緻で、色調



山田寺出土土器実測図

は暗灰色を呈するものが多い。瓦類ではこのほかに、蓮華文鬼瓦、鬼面文鬼瓦、鴟尾、面戸瓦・熨斗瓦などの道具瓦、「大」と刻した文字瓦などがある。

山田寺出土の塼仏には、第1次調査で明らかにしたように、独尊像・四尊蓮座・十二尊連座のものがある。今回の調査でも、十二尊連座塼仏を中心に多数が出土した。このうち十二尊連座塼仏の一つには、黒漆を下地として貼った金箔が残る。金堂壁面も塔と同じく、金色の塼仏で飾られていたのであろう。

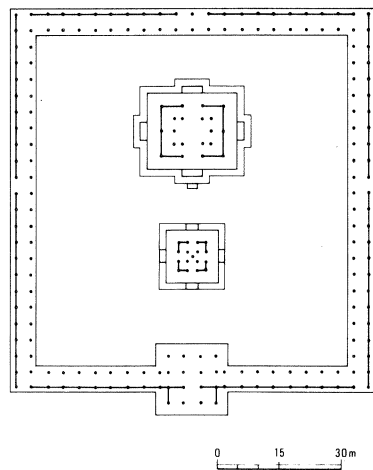
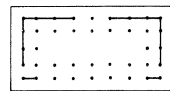
土器類は、土坑や溝から少量出土したが、山田寺創建時のものは少く、むしろ平安時代以降のものが多い（実測図参照）。8～10は、S K 206出土の土師器で、口縁端部を丸く巻き込む。11世紀後半のものであろう。3の瓦器碗と6の瓦器皿は、S D 210出土。1・2の瓦器碗と7の土師器小皿は、S D 218出土。5の瓦器碗と4の青磁は、S D 222出土。この青磁は、外面にヘラ描きによる雷文が施され、中国明代の製品と思われる。

まとめ 調査の結果、金堂および北面回廊の規模と構造が明確になるとともに、様々な新知見をえることができた。金堂については、特異な建物構造は言うに及ばず、蓮華座を伴う礎石や階段耳石の浮彫り、礼拝石の存在など従来の古代寺院では類例をみない諸特徴が知られた。金堂は皇極朝の創建とみられ、その周辺は奈良時代に瓦敷、平安時代にバラス敷で整備されるものの、建物自体はほとんど手が加えられた痕跡はない。創建に近い姿のまま遅くとも12世紀

後半までには焼失し、その後再建されることなく現在に至ったのである。また金堂の基準尺は、一尺が33.3cmと考えられたが、この数値は唐尺と高麗尺との中間値を示す。なぜこのような尺度が用いられたかは疑問として残る。一方、回廊の基準尺は1尺が約30cmであり、それは塔や中門あるいは講堂にも共通する。この2つの基準尺は、おそらく建立年代の差を示すものなのであろう。

伽藍配置については、北面回廊の検出によって、四天王寺式の配置と異なることが明確となった（復原図参照）。回廊が金堂・塔のみを囲む形式は、むしろ飛鳥寺や法隆寺西院に近い。2次にわたる調査により、伽藍中軸線が求められ、塔と金堂の心々距離30.1m、金堂と北面回廊間26.1mがわかる。北面回廊ではこの中軸線上に柱が立つ。北面回廊の柱間は、桁行13尺等間、梁行12尺等間であり、第1次調査の成果とも合せると、中軸線から西面回廊まで柱間は、10間ないし11間となる（復原図では11間とした）。また東西両回廊は、同じ柱間で割付けると南北23間分が復原される。なお中門については、足場穴を手掛りに桁行3間（中央間14尺、両脇間12尺）、梁行3間（12尺等間）と想定し、中門と塔の心々距離を29.4mとした。さらに講堂については、現存する礎石の位置と伽藍中軸線とを合せ考え、北面回廊と講堂の心々距離35.2mを求めた。この場合、講堂礎石は伽藍中軸線上に位置することとなる。したがって、中軸線上に中心をあわせて講堂が建てられたとすると、その規模は桁行8間、梁行4間とみなせるのである。

なお、昭和53年3月、山田寺寺域内での水道管理設工事に伴い、講堂東方のA地点で東西にならんだ礎石2個が、また講堂北方のB地点からは掘立柱の柱根が発見された（位置図参照）。前者では回廊あるいは僧房の存在が予想され、後者では寺域の北限を示す施設かとも考えられる。今後の調査の進展をまちたい。



山田寺伽藍配置復原図